# 紫式部における日記と物語

上野英二

## 一

古今の序をもじって言うならば、『源氏物語』という作品は、「光源氏は式部か心を種としてよろつのことのはとそなれりける」[1]と言うべき作品であった。鎌倉の代、『弘安源氏論義』は、「やまと歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞ成れりける」[2]という『古今和歌集』仮名序の和歌の定義に擬えて、『源氏物語』は「式部か心を種としてよろつのことのは」と成った作品であると、その跋に言う[3]。『源氏物語』が、「式部」すなわち紫式部の創作にかかるということは、かつての『源氏物語』の読み手達にとって、言うまでもなく常識に属していた。

一方、『紫式部日記』、その題号に「紫」の名を負い、文字通り紫式部の日記であることを標榜する『紫式部日記』も、もし古今序風に言うのなら、やはり「式部か心を種としてよろつのことのはとそなれりける」と言うことが出来るであろう。否、「式部が心を種」とした「よろつのことのは」ということであるならば、他ならぬ『源

氏物語』自身が、螢の巻の物語論において「いつはり」と言い、「虚言」と認めている物語よりも、式部の行跡が直截に書かれているであろう『紫式部日記』の方が、よりその表現にふさわしいかも知れない。いずれにしても『弘安源氏論義』のように、『源氏物語』を「式部か心を種」とした「よろつのことのは」だとするならば、『紫式部日記』も同じように、「式部か心を種」とした「よろつのことのは」の少なくとも異なる現われであることはやはり認めなければならないだろう。

では、『源氏物語』と『紫式部日記』という、ジャンルも違えば文体も異なる二つの作品が、ともに「式部か心を種」とするものであるとすれば、そのことは一体、それぞれの作品にどのように認められるのであろうか。そして、その「式部か心」とは、日記と物語という二つの異なった作品において、「よろつのことのは」としてそれぞれどのように顕現しているのであろうか。ある場合には、同一人物の作品であることがまったく自明の公理として前提され、ある場合にはまったく別の作品として潔癖に別箇のものと扱われもした、この二つの作品の間の関連を問い直す作業が改めて必要となってくるのではあるまいか。

『源氏物語』と『紫式部日記』[4]、確かにこの二つの作品の間には、大きな類似点を認めることが出来る。例えば、

『紫式部日記』、秋色の土御門殿の描写の冒頭、

秋のけはひ入り立つままに、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし。池のわたりのこずゑども、遣水のほとりの叢、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。

御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞こしめしつつ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御ありさまなどの、いとさらなることなれど、

以下叙述は、紫式部の述懐に移ってゆくが、この冒頭に似る描写は、『源氏物語』にも見出すことが出来る。

弥生の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よりことに尽くしてにほふ花の色、鳥の声、ほかの里には、まだ古りぬにやと、めづらしう見え聞こゆ。山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど、若き人々のはつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる船造らせたひける、急ぎさうぞかせたまひて、おろし始めさせたまふ日は、雅楽寮の人召して、船の楽せらる。親王たち上達部など、あまた参りたまへり。中宮、このころ里におはします。

胡蝶の巻冒頭、六条院南の町紫上御殿の春景。相対的な文の長さ、複雑な構文、独特の語感や韻律などの類似は一読して印象的なことだが、「秋のけはひ入り立つままに」、「弥生の二十日あまりのころほひ」と、ともに典雅な暦日の表現によって筆を起こす点、続いて「土御門殿のありさま」、「春の御前のありさま」云々と、その美を総括して述べる展開、春と秋との違いこそあれ、『紫式部日記』と『源氏物語』は同巧と言ってよい相貌をすでにのぞかせている。第二文、描写の眼は、それぞれ「池のわたりのこずゑども、遣水のほとりの叢」、「山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしき」へと向かうが、視線が動くことも同じなら、語句を並列するという書き方も共通する。用いられた語彙も、「池のわたり」「中島のわたり」、「こずゑ」「木立」、「色づき」「色まさる」と似通っている。さらに『紫式部日記』に見られる、「色づきわたりつつ」、「不断の御読経の声々」「水のおとなひ」という視聴両覚にわたる描写も、「花の色、鳥の声」と、『源氏物語』にもそのまま現われている。このよう

な自然描写を重ねて、やがて筆はそれぞれ「御前にも」、「中宮」と人物に焦点を移してゆくが、これも日記、物語双方に共通する点だと言ってよい。『紫式部日記』と『源氏物語』、そのわずかの部分を比較しただけでも、その表現の近似には、やはり否定し難いものがある。

さらに似たような傾向は、『源氏物語』の他の部分にも容易に見付けることが出来る。

年立ちかへる朝の空のけしき、名残なく曇らぬうららけさには、数ならぬ垣根のうちだに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に、木の芽もうちけぶり、おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。まして、いとど玉を敷ける御前は、庭よりはじめ見所多く、磨きましたまへる御方々のありさま、まねびたてむも言の葉たるまじくなむ。

春の御殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひて、生ける仏の御国とおぼゆ。

『紫式部日記』と『源氏物語』胡蝶との間に認められた類似は、同じく『源氏物語』初音の巻の冒頭にも同様に指摘し得るであろう。(5) ことに、「雪間の草若やかに色づきはじめ」という表現に見られる外界の把握の仕方は、『紫式部日記』「おのがじし色づきわたりつつ」、胡蝶「色まさる苔のけしき」とまったく同一の関心に由来している。

このような、外界の事象を時の経過にともなう変化の相において把握する捉え方は、日記、初音、胡蝶に一貫して認められる。

「一つの個別と他の個別との関係を問い、一そう高次の一般的な認識によって個別の位置づけをする」ことが、紫式部の文章の特徴として指摘されている（渡辺実『平安朝文章史』）が、

入り立つままに　あはれまさりけり　やうやう涼しき　（『紫式部日記』）

いつしかとけしきだつ　磨きましたまへる　（初音）

常よりことに　まだ古りぬにやと　（胡蝶）

これらの表現の背後に窺われる認識の仕方も、一つの個別を、その一般的なあり方、乃至はその変相との関係において把握しようとする点で、いずれもその例に洩れない。

このような、「個別の位置づけ」の傾向は、日記、物語を通じて、次のような語の使用において、さらに明確に見てとることが出来よう。

入り立つままに　色づきわたりつつ　もてはやされて　風のけはひに　聞きまがはさる　（『紫式部日記』）

うららかけさには　垣根のうちだに　けしきだつ霞に　まして　とりわきて　吹きまがひて　（初音）

思ふべかめるに　（胡蝶）

いずれも事物と事物、語句と語句とを関係づける語である。これらの語が活用されることによって、「個別の位置づけ」が行われ、複雑な構文が、日記・物語、それぞれに構築されていた。

日記、初音、胡蝶、『紫式部日記』と『源氏物語』との間には、その文章上顕著な類似が認められる。ジャンルも文体も、そしてその表現の内容も、まったく別の作品でありながら、日記と物語の間には、より根源的な世界認識の方法とその表現において、まったく同一の傾向が潜在的に存在していた。

したがって、「歌をも詠み詩をも作りて、名をも書き置きたるこそ、百年千年を経ても、たゞ今その主にさし向ひたる心地して、いみじくあはれなるものあれ。」という文脈のもとに、

繰言のやうには侍れど、つきもせず羨ましくめでたく侍は、大斎院より上東門院、「つれづれ慰みぬべき物語や候ふ」と尋ね参らせさせ給へりけるに、紫式部を召して、「何をか参らすべき」と仰せられければ、「めづらしきものは何か侍べき。新しく作りて参らせさせ給へかし」と申ければ、「作れ」と仰せられけるを承りて、源氏を作りたりけるとこそいみじくめでたく侍れ」と言ふ人侍れば、又、「いまだ宮仕へもせで里に侍ける折、かゝるもの作り出でたりけるによりて、召し出でられて、それゆえ紫式部といふ名を付けたると[6]も申は、いづれかまことにて侍らむ。その人の日記といふもの見侍りしにも、「参りける初めばかり、恥づかしうも心にくくも、又、そひ苦しうもあらむずらむとおの〳〵思へりける程に、いと思はずに呆けづき、かたほにて、一文字をだに引かぬ様なりければ、かく思はずと友達ども思はる」などこそ見えて侍れ。[7]

と、『源氏物語』の述作について語り、『紫式部日記』をも併せ読もうとした、『無名草子』に代表されるような、かつての『源氏物語』の読み手たちの関心のあり方は、すぐれて理に叶ったものであったと評することが出来よう。

古今序をふたたび借り用いるならば、『弘安源氏論義』が言うように、『源氏物語』も『紫式部日記』も、「式部か心を種」として「よろつのことのは」と成ったものだ、と確かに言うことが出来る。もしそうだとするならば、『源氏物語』も『紫式部日記』も、同じ紫式部の心を種とした万の言の葉として、その繁りをともに賞でられてしかるべきなのではないか。

## 二

しかし、『紫式部日記』と『源氏物語』との間にいかに類似が認められるにしても、一方は日記、一方は物語、両者は本質的にその性格を異にしている。元来ともに「式部か心を種」とするものでありながら、文体上、両者はやはりはっきりと区別されなければならない。

『紫式部日記』と『源氏物語』、日記の文章と物語の文章、二つの間の差異とは、一体いかなるものであろうか。この問題を考えるためには、他ならぬ『紫式部日記』の文章をそのまま引用して自らの叙述として取り込んで物語の一部に仕立て直している物語、『栄花物語』の文章を参照することが、有効な示唆を与えてくれるように思われる。本来、日記である『紫式部日記』の文章が、ひとたび物語として『栄花物語』の中に移されるとき、たちまちそれは、日記と物語との文体上の差異を歴然と際だたせることになる。

秋のけしきにいり立つまゝに、土御門殿の有様いはん方なくいとおかし。池の辺りの梢・遣水のほとりの草むら各色づき渡り、大方の空のけしきのおかしきに、不断の御読経の声〴〵あはれ勝り、やう〳〵涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水の音なひ、夜もすがらきゝかはさる。(8)

『栄花物語』巻八初花の巻、中宮彰子御産の条は、『紫式部日記』を資料の一つとしていて、それをこのようにそのまま借用して、物語の叙述としてしまうことも珍しくない。この箇所などは、『紫式部日記』秋色の土御門殿の描写を引用してほとんど片言隻語違わぬ如くであるが、『紫式部日記』におけるそれと、『栄花物語』の中に

置かれた場合のこれとは、質的にはまったく別のものになっている。

例えばまず、『紫式部日記』の場合、この箇所は一連の中宮御産の記録の冒頭に置かれ、その導入を果しつつ、その舞台となった土御門殿の秋色の佳麗を描写をすること、その描写自体に叙述の主眼があるのに対して、『栄花物語』の場合のこの箇所は、中宮御産に至る時の経過を語る単なる一齣としての位置しか与えられていないように思われる。

『栄花物語』の場合、この箇所の直前には、

かういふ程に、はかなう七月にもなりぬ。中宮の御けしきも今はわざと御腹のけはいなども苦しげにおはしまし、たはやすからぬさまにおぼされたるも、見奉る人心苦しう思きこえさす。内よりは御使のみぞ頻に参る。猶ほかよりは、承香殿に御心ざしあるとぞ、自ら聞ゆれど、すべて何れの御方も参らせ給事いと難し。一品宮内におはしませば、たゞその御方に渡らせ給てぞ、御心も慰めさせ給。この二宮の御事をぞ返〳〵おぼしめしける。

という記事があり、直後には、

一日までは法興院の御八講とのゝしりし程に、七夕の日にもあひ別れにけりとぞ。幾十の羊の歩みを過し来ぬらんとのみこそ覚えけれ。かくて宮の御事は、九月にこそ当らせ給へるを、

という記述が続いてゆく。このような文派に置かれている以上、この箇所は、こうした『栄花物語』の叙述の流れに沿って理解されなければならない。

『栄花物語』の叙述の主眼は、中宮御産をめぐる出来事を時間の流れに従って継起的に語ることにあり、「七月」、

「法興院の御八講」、「七夕」、「かくて宮の御事は、九月にこそ当らせ給へる」という配列のもとに位置づけられた「秋のけしきにいり立つまゝに」以下の叙述は、御産の場となる土御門殿の様子を紹介しつつ、秋の深まりを告げ、臨月の迫ることを述べるものであると読むべきであろう。一方、『紫式部日記』の場合は、次に「御前にも」以下、話題の中心人物たる中宮彰子産前の様子を描写する叙述へ入る前置きとして、その御殿とそれをめぐる実況が語られるのであって、まったく『栄花物語』の場合とはその位置づけを異にしている。

もともと同一の人物の手に成り、ほぼ同一の文章であっても、作品と文脈を異にするならば、その意味も機能もまったく変わってしまう。本来、日記の文章として書かれても、物語に取り込まれればそれは質的な変容を免れ得ない。『紫式部日記』の断章であるという点では、『栄花物語』のこの箇所も、『紫式部日記』とともに「式部か心を種」とした「よろつのことのは」であることに違いはないが、しかしそれは本来の『紫式部日記』から見れば、『栄花物語』という台木に接木された、眺めも違えば彩りも違う、別物でしかないであろう。

そして、『紫式部日記』と『栄花物語』、日記と物語両者の間を何より截然と分つものは、それぞれの文章にあらわれた、叙述の主体のあり方であろう。

『栄花物語』の叙述の主体は、前からのつながりで言えば、「かういふ程に」と言う人物、これまで『栄花物語』を語ってきた人物、すなわち語手に擬せられる。当然以下も、文章の出所出自はどうあれ、基本的にその叙述の主体は、この不特定の誰とも知れぬ人物で一貫すると考えられる。「土御門の有様いはん方なくいとおかし」と判断するのも、「夜もすがらき、かはさる」と知覚するのも、この誰とも知れぬ人物である。同時にこの叙述の主体は、「中宮」の容態を記し、さらにその心中にまで触れ、さらには「内」について記し、その内面までを語

った上で、土御門殿の有様に言い及ぶという、自在にその視点を移動させて叙述をすることの出来る存在であるが、しかし作中世界において、実質的な人格を持って何かを具体的にふるまうということはない。

一方、『紫式部日記』の方は、「土御門殿」の「御前」に伺候する人物、「紫式部」その人に、その叙述の主体を求めることが出来る。後文の、

御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞こしめしつつ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御ありさまなどの、いとさらなることなれど、憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづね参るべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづわすらるるにも、かつはあやし。

という文章の、きわめて個性的な感想を洩らした人物、それが『紫式部日記』の叙述の主体でもあった。「土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし」という判断も、誰とも知れぬ不特定の人物が下した一般的な判断なのではなくて、『紫式部日記』の作中世界を構成し、その中を実際に生きた人物の、きわめて具体的な判断なのであった。「不断の御読経の声々、あはれまさりけり」と言うのも、「大方の空のけしきのおかしきに」（『栄花物語』）というごくありふれた聞かれ方によるものなのではなくて、「おほかたの空も艶なるにもてはやされて」という、独自な聞き方によって聞きとられたものなのであり、そこには、きわめて個性的な、作中の世界の存在としての、叙述の主体のあり様を見てとることが出来る。

『紫式部日記』に較べるならば、この箇所、『栄花物語』では、第二文第三文は少しく手を加えられ単純に接合され、表現の微細な部分などはならされて、性急な一文に仕立てられてしまっている。本稿第一章に指摘した。

『紫式部日記』の文章に特徴的に見えていた、

色づきわたりつつ　もてはやされて　聞きまがはさる

などの、「個別の位置づけ」にかかわる表現は姿を消し、一文を構成する各句は、連用中止法か接続助詞「に」によって単純に接続されるばかりで、『紫式部日記』の文章において見られた、複雑な文章と意味の構築は認められず、単なる事項の羅列にとどまるという印象はぬぐえないものとなっている。

『紫式部日記』では、「池のわたりのこずゑども」や「遣水のほとりの叢」がそれぞれ「色づきわたる」ことと相俟って、それに見合うように「艶なる」、「おほかたの空」の情景に「もてはやされて」、折から聞こえる「不断の御読経の声々」の「あはれ」が一層「まさる」という、個性的な認識に至る個々の叙述が、その叙述の主体において収束し、複雑な認識の叙述に組み上げられてゆくことになり、その中心には自ら、認識の主体、叙述の主体の存在が確固として想定されるのだが、『栄花物語』の場合は、「梢」なり「草むら」なり「大方の空」なり「御読経の声〳〵」なり「風のけはひ」なり「水の音」なりの、個々の叙述は、ただ羅列されるばかりで、それぞれ個々のままに叙述の役割を終え、次々と叙述の焦点は移っていってしまうので、その背後に、確たる視座を占め、一元的な叙述の基点の位置にあるような、叙述の主体を求めることは難しい。むしろ『栄花物語』の場合には、前文からの文脈の流れに従えば、自在に視点を移動させながら、多元的に叙述をすすめてきた叙述の主体のあり方を、そのままこの箇所にも認めるべきで、したがってその叙述も、個々の事項に個別的にかかわるばかりで、その叙述を終えるや次々とその焦点を移動させ、「土御門殿の有様」を一わたり通覧したものにとどまるものと考えるべきであろう。

これに対して『紫式部日記』の叙述は、紫式部その人に収束してゆく。個々の認識や叙述を越えて、それらを統合、位置づける主体が、作中世界に存在する一個の人格として考えられるのである。

そして、ひとたびその叙述の主体のもとに『紫式部日記』の文章を見直すならば、そこには、その時間的空間的位置までが特定出来るほど、その叙述の主体の個性的なあり方が反映されていることに改めて気がつく。「池のわたりのこずゑども」、「遣水のほとりの叢」、「おほかたの空」という遠近中の視線の移動は、逆にその視線の基点の位置を推定させるであろうし、「やうやう涼しき風」、「夜もすがら」の語は、秋の深まりを告げる全体の叙述の流れの中でも、その叙述の主体の時間的な位置をより明確に語ることになるであろう。さらに、「不断の御読経の声々」が聞こえ、「水のおとなひ」が「聞きまがはさ」れ、やがて「御前にも」と続いてゆく叙述をたどるなら、殿舎のどこに、この叙述の主体が位置するのか具体的に想像することさえ可能になる。

『紫式部日記』の叙述の主体は、その作中世界に、一個の個性的な人格として、しっかりとその位置を占めている。作中世界を実際に生き、そこでの出来事を叙述すると同時に、具体的に行動し感受し思考する存在である。一方『栄花物語』の叙述の主体は、言葉通りの語手であって、作中世界に存在はするものの、作中の世界に対しては、認識者観察者の位置にとどまり、それを伝達することはあっても、実質的な人格において何らかの行為によって作中世界と交渉を持つことは基本的にない。

『紫式部日記』において見られた「御前にも」以下のきわめて個性的な述懐は、したがって『栄花物語』ではその引用からは除外されたし、複雑にして十分個性的であった『紫式部日記』の文章も、『栄花物語』では一字違えず引き写されたように見えて実際は微妙に崩されてしまっている。

『紫式部日記』と『栄花物語』、二つは外見上は同じ体裁を見せながら、本質的にはまったく異質なものとなっている。叙述の主体のあり方という観点から見て、日記と物語とは、やはりまったく別種の作品なのであった。

『紫式部日記』という日記と、『栄花物語』という物語、この二つの作品に見られた違いは、そして、そのまま『紫式部日記』と『源氏物語』との違いでもある。

『源氏物語』においても、その叙述の主体は、『紫式部日記』のような個性的な人格としてはあらわれない。例えば、胡蝶の巻の冒頭、第一文、叙述は、「春の御前のありさま」と紫の上御殿を概観するかに見えて、「花の色、鳥の声、ほかの里には、まだ古りぬにやと、めづらしう見え聞こゆ」と、「ほかの里」の人々の眼を借りての叙述になっているし、第二文では今度は、「山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど、若き人々のはつかに心もとなく思ふべかめるに」と、それが「若き人々」の眼を通して語られることになる。次々に叙述の視点が自在に移ってゆくという点では、『源氏物語』の叙述の主体のあり方は、『栄花物語』の場合と軌を一にしている。『紫式部日記』のように、個性的な感想が洩らされることもない。『源氏物語』では、語手はしばしば草子地というかたちでその存在を示すことがあるが、それは、初音の巻に見られる「まねびたてむ言の葉たるまじくなむ」がそうであるように、ほとんど認識や伝達にかかわるものばかりで、作中の世界に対して、人格的に深くかかわりを持つものではなく、やはり物語の世界に対しては、観察伝達の立場に終始している。

事、文章にあらわれた叙述の主体のあり方に関するかぎり、『源氏物語』は、『紫式部日記』よりも『栄花物語』に類を同じくする。いかに『紫式部日記』と『源氏物語』の文章が類似し、同一の傾向を潜在的に共有しているにせよ、そして同様に、たとい『栄花物語』の一節が、そのまま『紫式部日記』の文章に由来するものであった

にしても、日記は日記としての、物語は物語としての文章のあり方というものを、それぞれ否定し難く呈するもののように思われる。

## 三

日記の叙述の主体のあり方と物語の叙述の主体のあり方とがはっきりと異なることは、次の例に照らしても確認し得ることである。

めづらしき光さしそふさかづきはもちながらこそ千代もめぐらめ

「四条の大納言にさし出でむほど、歌をばさるものにて、こわづかひ用意いるべし」など、ささめきあらそふほどに、

珍しき光さしそふ盃はもちながらこそ千代をめぐらめ

とぞ、紫さゝめき思ふに、四条大納言簾のもとに居給へれば、歌よりもいひ出でん程の声遣ひ、恥しさをぞ思べかめる。

（『紫式部日記』）

（『栄花物語』）

おそろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、事はつるままに、宰相の君にいひあはせて、隠れなむとするに、

（中略）「和歌ひとつづつつかうまつれ。さらば許さむ」とのたまはす。

（『紫式部日記』）

「け恐しかべき夜のけはひなめり」と見て、事果つるまゝに藤式部君[9]、宰相君といひ合せて隠れなんとするに、

（中略）「歌一つ仕うまつれ」と宣はするに、　（『栄花物語』）

『栄花物語』の叙述は、『紫式部日記』のほぼそのままの引き写しであるが、『栄花物語』に「紫」、「藤式部君」という紫式部を示す語が見えていることは、両者の間の顕著な違いである。

『紫式部日記』における「いひあはせて、隠れなむとする」、「ささめきあらそふ」という動詞の動作主体は、主語の明示を欠くゆえに、その叙述の主体すなわち紫式部に求められるであろう。このことは『紫式部日記』の叙述の主体は、叙述をするとともに、文中に記される行為の主体でも同時にあり得るということである。しかし一方、『栄花物語』の叙述の主体は、同じようには考えられない。文中に紫式部を示す語が見出される以上、その叙述の主体は、紫式部を作中の三人称者として扱い得る人物であると考えられなければならない。それは決して紫式部ではあり得ない。

『栄花物語』は、『紫式部日記』の文章を借りるに際して、紫式部の個人的な述懐を述べた部分や、その具体的な行動を記した部分は基本的に引用から除外している。ただ、ここでは紫式部作の和歌を紹介するために、それにかかわる紫式部の行動が記される必要が生じたわけだが、それがひとたび物語として綴り直されると、『紫式部日記』においては叙述の主体の行動を記すものと考えられていた動詞に対して、主語「紫式部」を、三人称者として補わなければならなくなったのである。

これに対して、本来の『紫式部日記』においては、それらの動詞の動作主体は文章の叙述の主体、紫式部、そしてその主語としては、語として顕在はしないけれども一人称者、「われ」が想定される。

これを要するに、一般に物語においては、文中の動詞に対する主語は基本的には三人称者であり、その叙述の

主体は、認識や伝達にかかわる場合を除いて、その主格には立たないのに対して、日記の場合、その叙述の主体は文中の動詞に対して、一人称主語「われ」として臨み得る、と概括することが出来る。

そしてこのことは、物語の叙述の主体は文章上に「客体化され、素材化され」ることは原則としてないのに対して、日記の叙述の主体は、文章上に「客体化され、素材化され」る、と捉え直すことが出来るであろう。

主格は、言語に表現せられる素材間の関係の論理的規定に基くものであつて、言語の行為者である主体とは全く別物である。例へば、「猫が鼠を食ふ」といふ表現に於いて、「猫」「鼠」「食ふ」といふ素材的事実相互に於いて、「猫」が「鼠」「食ふ」に対して主体となる様なものである。かういふ場合の主体は、素材間の関係に過ぎないのであつて、「猫が鼠を食ふ」といふ言語的表現そのものの主体は別でなければならない。（中略）

「私は読んだ」といふ表現に於いて、この表現をしたものは、「私」であるから、この第一人称は、この言語の主体を表してゐる様に考へられる。しかしながら、猶よく考へて見るに、「私」といふのは、主体そのものでなくして、主体の客体化され、素材化されたものであつて、主体自らの表現ではない。客体化され、素材化されたものは、もはや主体の外に置かれたものであるから、実質的に見て、「私」は前例の「猫」と何等択ぶ処がなく、異る処は、「私」が主体の客体化されたものであり、「猫」は全然第三者の素材化されたものであるといふことであつて、そこから第一人称、第三人称の区別が生ずる　（時枝誠記『国語学原論』）

言語の主体が、自らのことを話題として述べるときには、そこに表現された主体は、「主体そのものではなくして、主体の客体化され、素材化されたもの」である。

したがって、自らの行動を話題として、叙述をする日記の叙述の主体は、主語として文章上に顕在化されることはなくても、「客体化され、素材化され」た存在であるということになる。

自らを、文章の上に「客体化」し「素材化」する以上、日記の文章には常に自らを客観的に眺め、対象化しようとする眼がはたらいていることになるであろう。無論そのことが、日記という文章に、深い内省の場ともなる可能性を拓くものであることは言うまでもない。しかし、物語には、そういうことはない。物語の叙述の主体は、認識や伝達にかかわる場合以外は、文章上に対象化されることはない、まして、作中人物を駒として動かすばかりで、自らは表現の素材の側に回ることのない」その言語主体は、「客体」として文章上に対象化されることはついにないのである。

## 四

文章における叙述の主体の対象化ということは、『紫式部日記』においては、自らについて語る文章のみならず、専ら三人称者について述べる文章においても見出すことが出来る。

よろづの物のくもりなく白き御前に、人のやうだい色あひなどさへ、けちえんにあらはれたるを見わたすに、よき墨絵に、髪どもを生ほしたるやうに見ゆ。いとどものはしたなくて、かかやかしきここちすれば、昼はをさをささし出でず、のどやかにて、東の対の局よりまうのぼる人々を見れば、色ゆるされたるは、織物の唐衣、おなじ袿どもなれば、なかなかうるはしくて心々も見えず。（中略）人の心の思ひおくれぬけしきぞ、

あらはに見えける。裳、唐衣の縫ひものをばさることにて、袖口に置口をし、裳の縫ひ目に白銀の糸を伏組のやうにし、箔をかざりて、綾の紋にする、扇どものさまなどは、ただ雪深き山を月のあかきに見わたしたるここちしつつ、きらきらと、そこはかと見わたされず、鏡をかけたるやうなり。

御簾のなかを見わたせば、色ゆるされたる人々は、例の青色赤色の唐衣に、地摺の裳、表着は、おしわたして蘇芳の織物なり。（中略）上うす蘇芳、、つぎつぎ濃き蘇芳、なかに、白きまぜたるも、すべて、しざまをかしきのみぞ、かどかどしく見ゆる。いひしらずめづらしく、おどろおどろしき扇ども見ゆ。

うちとけたるをりこそ、まほならぬかたちもうちまじりて見えわかれけれ、心をつくしてつくろひ化粧じ、劣らじとしたてたる、女絵のをかしきにいとよう似て、年のほどの、おとなびいと若きけぢめ、髪のすこしおとろへたるけしき、またさかりのこちたきがわきまへばかり見わたさる。さては、扇より上の額つきぞ、あやしく人のかたちを、品々しくも下りてももてなすところなめる。かかるなかにすぐれたると見ゆるこそ、かぎりなきならめ。

『源氏物語』に比較しても、『紫式部日記』には、「見ゆ」（複合語としては、「見わたさる」など）の語の使用が際だって多いが、「見ゆ」という語によって三人称者について述べるとき、そこには、叙述の主体すなわち一人称者の認識自体が、文章上に対象化されていると言えるのではなかろうか。

時枝誠記は、現代語の「山が見える。」、「汽笛が聞こえる。」、「犬がこはい。」などの表現について、次のように述べている。

右の諸例に於ける述語、例へば、「見える」、「こはい」をとつて考へて見るのに、これらの語は、一方では、主観的な知覚、感情の表現であると同時に、他方では、そのやうな知覚や感情の機縁、条件となる客観的な事柄の属性を表現してゐる。云はば、これらの語は、主観、客観の総合的な表現で、我々がこれらの語を用ゐる時、必ずしも一方的に主観的なものだけを表現してゐるものでもなく、また、客観的なものだけを表現してゐるのでもない。

（『日本文法　口語篇』）

現代語で、「見える」を述語とする文は、「知覚や感情の機縁、条件となる客観的な事柄の属性を表現してゐる」と同時に、「主観的な知覚、感情の表現」でもある。例えば「山がある」に対して「山が見える」、「山が高い」に対して「山が高く見える」、「川が流れている」に対して「川が流れているのが見える」など「見える」を述語とする文例を考えてみれば、「見える」の無い場合と較べて、より主観的な表現になっていることは、誰しも認めるところであろう。

恐らくそれは、古代語においてもおおむね認められることで、例えば『紫式部日記』「人の心の思ひおくれぬけしきぞ、あらはに見えける」を、試みに文末を「あらはなりける」と変えたものと比較してみても容易に首肯し得ることと思う。(10)

恐らく『紫式部日記』に頻出する、「見ゆ」を述語とする文もまた「主観的な知覚、感情の表現」であったと考えられる。そしてその主観とは、いったい誰のものか。言うまでもなくそれは、「見ゆ」に対応する「見わたすに」、「見わたせば」の措辞に徴するに、その動作主体、すなわち叙述の主体、紫式部その人の主観に他ならないであろう。

そしてまた現代語の「見える」には、自発の表現の一つとして次のような特徴があわせて指摘されているが、それも古代語の「見ゆ」に溯り得るものと思われる。

Xガ　V-（自発形）

Xに、それがV-で表わされる動作・作用を受けた結果であるような変化が起る。しかし、その動作・作用の主体は意識されず、Xが、「ひとりでに」そうなるということを表わす。（したがって、一般の動作・作用の主体は文に現れることがない。）ただし、見エル、聞コエル、感ジラレルのような感覚を表わす動詞から派生されたもの、および、思ワレルのように思考作用を表わす動詞から派生されたものの場合は、その感覚、知覚、思考の主体が、「Yニ」の形で文に表われることがある。　（寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』）

「見える」を述語とする文は、しばしば「私に（は）山が見える」「彼に（は）山が見えた」のように、その感覚、知覚の主体を、ニ格の位置に明示することがある。ちょうど、一般の動詞に対して、その動作主体、主語を想定することが出来るように、「見える」などの語には、感覚、知覚の主体を求めることが出来るのであった。

これは古代語においても同様で、『紫式部日記』においても、「人にかうおいらけものと見おとされにける」などのように、認識の主体が、文章上に明示された例を見出すことが出来る。けれども、このような例は『紫式部日記』に見られる「見ゆ」のなかでは、むしろ例外に属し、認識の主体が示されない場合がほとんどである。その場合、認識の主体は、それが明示されないゆえに叙述の主体、紫式部であると考えられる。

「見ゆ」という述語に対して、叙述の主体、紫式部が、その認識の主体として想定されるということは、とりも直さず、それが主観の表現ということにとどまらず、叙述の主体、紫式部が、その認識の主体として「客体化

され、素材化され」ていることを前提とするであろう。『紫式部日記』の文章において、その叙述の主体は、動詞に対する動作の主体としてばかりではなく、「見ゆ」に対する認識の主体としても、対象化されている。そして「見ゆ」が「感覚を表わす動詞」である以上、その認識自体もすでにそこには対象化されている。すなわち、紫式部は、作中世界の事件に対して袖手傍観、客観冷静な観察者にとどまるように見えるけれど、その実、そこにきわめて雄弁に、自らの存在を語っていたことになる。

しかし、このことは日記というもの一般に見られる現象ではない。三人称者について述べる文章においてまで、叙述の主体がそこに対象化されることは、一般の日記においてはむしろ無用の事であって、他の日記作品の実例に照らしても、『紫式部日記』に特徴的な現象であると考えられる。

三人称者に属する事柄の認識について、一々その認識の主体、乃至その認識自体が対象化されて述べられているということは、その認識そのものが、一般普遍的なものではなくて、他ならぬ紫式部という特定の個性によって捉えられた、独自の認識であるということを物語るであろう。「紫式部の文章は、解釈で色どられているために、解釈を施されずに描かれた事実がもつような迫力と客観性を、強く備えてはいないのである」（渡辺実『平安朝文章史』）とは、『源氏物語』をも含めた紫式部の構文一般について述べられたことだが、それはそのまま『紫式部日記』に顕著に見られる、「見ゆ」についても同様に指摘し得る事柄であろう。構文はおろか、『紫式部日記』においては、認識自体が「解釈で色どられて」いて、事実が事実のままに認識されていたわけでは、必ずしもなかった。

「見ゆ」において見出された認識にも、「解釈」のあとは著しく、その内容もきわめて個性的なものになってい

る。

ただ雪深き山を月のあかきに見わたしたるここちしつつ、きらきらと、そこはかと見わたされず、鏡をかけたるやうなり。

女絵のをかしきにいとよう似て、年のほどの、おとなびいと若きけぢめ、髪のすこしおとろへたるけしき、またさかりのこちたきがわきまへばかり見わたさる。

対応する『栄花物語』の叙述は、前者、「雪深き山を月の明きに見渡したるやうなり。まねびやるべき方なし」。後者は直接対応する叙述を持たないが、当該部分の前後、女房達の装束を挙げて、「さま〴〵なり」、「皆同じさまなり」、「これもいとおかしう見ゆ」と、平板でありふれた記述が並ぶのに較べるならば、『紫式部日記』の認識の独自性は一層際だつばかりであろう。『紫式部日記』においては、専ら三人称者について語る文章であったとしても、その背後には、紫式部その人の存在が遍満している。

このような、『紫式部日記』における認識のあり方は、その叙述の主体、紫式部の見ることへの強い自覚と恐らく無関係ではない。『紫式部日記』には、

柱がくれにて、まほにも見えず。

うちやすみ過ぐして、見ずなりにけり。

奥にゐてくはしうは見はべらず。

というように、見なかったことがことさら述べ立てられることが多いが、このことは逆に、『紫式部日記』の見

ることへの意識の大きさを裏書きするものであろう。そして、こうしたことわりは、一連の彰子御産の記事のみならず、消息文と呼ばれる部分にも、「みづからえ見はべらぬことなれば、え知らずかし」などと現れてもいるから、『紫式部日記』に描かれることは、すべて原則として紫式部の見聞に入った事柄であるということを示すのであろう。つまり、『紫式部日記』には、紫式部自身が眼で見、耳で聞いた事柄が記されるのであって、終始一貫その叙述の主体、紫式部の感受性を離れないのである。

無論、『源氏物語』にも「見ゆ」を述語とする文が無いわけでは決してない。[11] 現に先に引用した胡蝶の巻には「常よりもことに尽くしてにほふ花の色、鳥の声、ほかの里には、まだ古りぬにやと、めづらしう見え聞こゆ」とあるし、初音の巻には、「いつしかとけしきだつ霞に、木の芽もうちけぶり、おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし」とある。しかし、『紫式部日記』の場合と『源氏物語』の場合とでは、その感覚、知覚の主体のあり方から言ってまったく性格の異るものと解釈される。胡蝶の例では、「ほかの里には」と知覚の主体が明示されているように、作中人物の眼を借りた「見ゆ」であるし、初音の巻のそれは、その知覚の主体は、文章の叙述の主体、語手に求められるが、その認識は語手に独自なものと言うよりも、より一般的な、この場に立ち合った人ならば、この語手ならずとも持ち得るような認識であると考えられる。何よりも「ぞかし」という、聞手に同意を求めるような口吻が、その証左となっているのではないか。この場合、語手は、不特定の人間の認識としても一般化されるような認識を、代表して述べているに過ぎない。

『源氏物語』の叙述の主体が、次々に視点を移動させてゆくということはすでに述べたが、認識のあり方自体も、必ずしも特定の個性を反映するものだとは考えにくい。

これに対して、『源氏物語』の「見ゆ」は、きわめて個性的なのである。そこに見出される知覚の主体のあり方を較べるならば、『紫式部日記』の叙述の主体の個性の強さは、やはり認めなければならないだろう。

## 五

「見ゆ」を述語とする文が頻出すること、そしてそこに窺える叙述の主体の個性の大きさ、『紫式部日記』の文章は、『源氏物語』に対しても、際だった違いを呈しているが、それはとりもなおさず、その叙述の主体、紫式部の「自己」意識の大きさの現われであると考えられる。佐竹昭広先生によれば、古く萬葉集の和歌に数多く見られる「見ゆ」に関して、次のようなことが指摘されるという。

萬葉集における「われ」の頻用は、彼らの自己中心性係数の高さを暗示するものであった。ということは、彼らが、すべての対象を自己との関係において主体的に把握するこころの持主だったことを意味する。「見ゆ」とか「聞こゆ」とか「思ほゆ」とか、「われ」の対象把握に関する語の使用が、萬葉集にきわだって多いという事実も、彼らの自己中心性係数の徴証として理解できることだ。「見ゆ」や「聞こゆ」「思ほゆ」の用法が古今集以後、衰亡の一路を辿ってゆく現象と自己中心性係数の低下現象とは、多分密接なかかわりがあると思われる。

（「萬葉・古今・新古今」、『萬葉集抜書』所収）

これに倣うならば、『紫式部日記』における「見ゆ」の頻用も、紫式部その人の「自己中心性係数」の大きさを示すものとして解釈出来るであろう。『紫式部日記』における紫式部も、「すべての対象を自己との関係におい

て主体的に把握するこころの持主だった」と考えられる。

だが、時代はすでに「見ゆ」などの用法が「衰亡の一路を辿ってゆく」「古今集以後」である。『源氏物語』という作品を一方に置きながら、では、日記における紫式部の「自己中心性係数」の大きさは、どう考えられるべきなのであろう。

すでに時代が「見ゆ」の衰亡期を迎えていたとするならば、それは『紫式部日記』に個性的な、つまりはその叙述の主体、紫式部に個性的な現象であるということになるであろう。『源氏物語』に較べても、『紫式部日記』の叙述の主体の「自己中心性係数」は特に大きかった。

そして、その「自己」たるや、きわめて個性的にして強固な「自己」なのではなかったか。『紫式部日記』における「自己中心係数」の大きさは、その「主体的」な把握の仕方の独自性においても見てとることが出来る。

行幸ちかくなりぬとて、殿のうちをいよいよつくろひみがかせたまふ。世におもしろき菊の根をたづねつつ掘りてまゐる。いろいろうつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植ゑたてたるも、朝霧の絶え間に見わたしたるは、げに老いもしぞきぬべきここちするに、なぞや、まして、思ふことの少しもなのめなる身ならましかば、すきずきしくももてなし、若やぎて、つねなき世をも過ぐしてまし。めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひくかたのみ強くて、ものうく、思はずに、なげかしきことのまさるぞ、いと苦しき。いかで、いまはなほもの忘れしなむ、思ふかひもなし、罪も深かなりなど、明けたてばうちながめて、水鳥どもの思ふことなげに遊びあへるを見る。

水鳥を水の上とやよそに見むわれも浮きたる世を過ぐしつつ

かれも、さこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど身はいと苦しかんなりと、思ひよそへらる。

水鳥が思うこともなく水の上に遊んでいるのが、「見ゆ」と捉えられるが、その認識はただちに我身に向い、ひき較べられて、「身はいと苦しかんなり」と判断される。「見ゆ」はやはり、紫式部の、個性的にして強固な「自己」に複雑に彩られている。

『紫式部日記』の紫式部にとって、ものを見ること、乃至は見えることにおける「自己」の大きさは尋常のものではなかった。

水鳥を水の上とやよそに見むわれも浮きたる世を過ぐしつつ

という歌に端的に現れてもいるように、紫式部にとって、見ることと「われ」とは密接不可分のものであったらしい。「めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひくかたのみ強くて、ものうく、思はずに、なげかしきことのまさるぞ、いと苦しき」という、自身の述懐によっても、紫式部の認識のあり様というものを一般化することが出来るだろう。[12] 紫式部にとって対象を認識することは、それ自体、自覚の対象であったし、同時に認識する「われ」自身も認識の対象であったのだ。認識における過大な「自己」が、やがてその「自己」までも、その認識の対象に組み入れてしまった、と言うべきであろうか。しかし、他ならぬそのことが、『紫式部日記』を「自己」を正面切って問題に据えた空前の作品にしていることもまた事実である。

このような『紫式部日記』の「自己」のあり様は、文章の面から言えば、叙述の主体に属する事柄が、対象語格の位置において「客体化され、素材化され」ていることとして特徴的に現われている。

「水がほしい。」「母が恋しい。」などの情意性述語を述語とする文における「水」や「母」などのように、「感

情を触発する機縁となるもの」を対象語と呼ぶ（時枝誠記『国語学原論』）が、『紫式部日記』の文章においては、主格の位置のみならずこの対象語格の位置に、叙述の主体に属する事柄が対象化されて述べられることが少なくない。

例えば、先に採り上げた、「めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても」に始まる文の、文末の述語は「いと苦しき」であるが、その主語は無論この文章の叙述の主体、すなわち紫式部、そして対象語にあたるのは「ただ思ひかけたりし心のひくかたのみ強くて、ものうく、思はずになげかしきことのまさるぞ」であるが、これも内容的には、紫式部自身のことに属する。

あるいは、土御門殿の秋色を描いた部分の、

御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞こしめしつつ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御ありさまなどの、いとさらなることなれど、憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづね参るべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづわすらるるにも、かつはあやし。

「あやし」という述語に対する主語や対象語も同様である。主語は叙述の主体、紫式部。対象語にあたるのは、彰子のありさまを讃嘆し、かつそう讃嘆する自分を自らの平素のあり方から反省する、紫式部自身に属することであろう。[13]

すなわち、『紫式部日記』の文章においては、情意性述語の対象語として、叙述の主体、紫式部に属する事柄が「客体化され、素材化され」ることが珍しくない。一方、主語の方も、明示されることはなくても、叙述の主

体、紫式部が考えられることがほとんどであるから、こうした文は、主語も紫式部、対象語も紫式部、「私は、私が～。」という構造を持つことになる。自らが、自らを対象として捉えて判断し、さらに評価を下す。「自己」は二重に対象化されるのである。[14]「自己」の行実を記す日記多しと言えども、そこには素朴な「自己」の対象化はあっても、これほど徹底した対象化の行われた例は必ずしも多くはないであろう。

しかしながら、そこにおいて最終的に下された「自己」への評価は、決して高いものではなかった。「あやし」、「いと苦しき」と、必ずしもその評価は、紫式部にとっては肯定的なものにはならなかった。のみならず、例えば「行幸ちかくなりぬとて」以下の一節にも窺えるように、紫式部自身について下された評価のほとんどは、どちらかと言えば否定的なものばかりなのであった。せっかく「自己」を徹底して対象化した末に得られた評価でありながら、なぜそれは、こう揃って芳しいものでないのであろうか。

「あやし」、「いと苦しき」という、紫式部の「自己」への評価から、思い出されるのは、心理学の側からの、「自己意識」に関する次のような報告であろう。

人は、時に、自分の自己意識、自己概念が主我の現実のあり方からずれていることに気づくことがあるが、このような場合にどのような反応をするのであろうか。もちろん、当初の直接的な反応は、「こんなはずではない」といった当惑と混乱であろう。

理想的自己像と私的な現実の自己概念（中略）の両者も、通常は相互に内容の点で浸透し合い、また、基本的には相互に調和してバランス状態を保っている。しかし、時に両者が矛盾葛藤することも珍しくはない。現実の自分自身が、自らの望むところとかけ離れた存在である、としか思えない時があるのである。このよ

うな時、人は、自分自身について否定的な見方しかできなくなり、自己批判、自己不信、自己嫌悪、など（中略）におちいることになる。

（梶田叡『自己意識の心理学［第二版］』）

この見解は、『紫式部日記』の「自分自身について」の「否定的な見方」を考える上で大いに参考になる。そして、この見解を借りるならば、紫式部の「自己」の内実についても、もう少し分析的に理解することが可能になるかも知れない。

そしてもし、このような状況が、『紫式部日記』における紫式部にも当てはまるとするならば、その文章に現れた、「自己」、叙述の主体の対象化ということは、必ずしも紫式部にとって好ましいものであった、とは言い切れなくなってしまうのではないか。理想の高みから現実を対象化するならば、勢いそれは、「否定的な見方」に傾むかざるを得ないであろう。もし、紫式部の「理想的自己像と私的な現実の自己概念」が「矛盾葛藤する」ものであるとしたら、自らを対象化してゆく日記の文体[15]は、かえって「自分自身について」の「否定的な見方」を助長するばかりなのではあるまいか。

## 六

『紫式部日記』の「否定的な見方」に対して、一転、明るく、理想的な世界が展開されるのは、他ならぬ『源氏物語』である。例えば「かれも、さこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど身はいと苦しかんなりと、思ひよそへらる」と、暗澹たる思いにおいて捉えられた「水鳥」は、『源氏物語』胡蝶の巻においては、六条院のめでたき点景と

しての、あらまほしき「水鳥」として描かれている。

水鳥どもの、つがひを離れず遊びつつ、細き枝どもを食ひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に紋をまじへたるなど、ものの絵やうにも描き取らまほしき、まことに斧の柄も朽いつべう思ひつつ、日を暮らす。

胡蝶の巻は、『紫式部日記』に描かれた、一条天皇の土御門殿行幸の史実を素材として書かれているという可能性を指摘されている（島津久基『源氏物語新考』）[16]が、同じ素材に対する異なった叙述は、『紫式部日記』と『源氏物語』という、二つの文体の違いを対照的に浮かび上がらせている。

御輿迎へたてまつる船楽いとおもしろし。寄するを見れば、駕輿丁の、さる身のほどながら、階よりのぼりて、いと苦しげにうつぶしふせる、なにのことごとなる、高きまじらひも、身のほどかぎりあるに、いとやすげなしかしと見る。

とは、『紫式部日記』一条天皇土御門殿行幸の一節。「駕輿丁」の姿は紫式部の眼に「いと苦しげ」と捉えられるが、ちょうど「水鳥」の場合と同様、やがてその思いは我身へ向い、「否定的な見方」に沈んでゆく。一方、同じ下賤の者を描いても、『源氏物語』には、一点の曇りさえない。

物の師ども、ことにすぐれたる限り、双調吹きて、上に待ちとる御琴どもの調べ、いとはなやかにかき立てて、安名尊遊びたまふほど、生けるかひありと、何のあやめも知らぬ賤の男も、御門のわたり隙なき馬車の立処にまじりて、笑みさかえ聞きけり。

日記においては、対象の認識は、そのまま自らへの省察へと向うのであるが、物語にあっては、その文体上、そこに紫式部自身の述懐の交ろうはずもない。そこには、ただただ理想的な、浪漫的な描写が繰りひろげられる

ばかりなのである。

日記と物語のこのような違いは、その言語主体紫式部の、文章への現われ方の違いに起因すると考えられる。日記の場合は、紫式部は文章上に叙述の主体として臨み、その言語素材として対象化される。したがって、その文章は、紫式部の「自己」を離れ得ない。これに対して、物語には、言語主体はおろか、叙述の主体、語手すらも、文章には十分には対象化されない。したがって、紫式部の「自己」は、物語の文章の表面に顕在化される余地はない。紫式部の「自己」、その感受性や視点から離れ得るという点において、物語という文体は、日記と較べて比較を絶した自由を獲得したと言い得るであろう。物語という文体は、現実を越え得る、自由な想像力の飛翔の場であった。

例えば、『紫式部日記』、

殿、若宮いだきたてまつりたまひて、御前にゐてたてまつりたまふ。上いだきうつしたてまつらせたまふほど、いささか泣かせたまふ、御声いとわかし。

一条天皇が新生の皇子との初めての対面に臨む場面であるが、これに較べるならば、『源氏物語』桐壺の巻、新生の光源氏と桐壺帝の対面の描写が、いかに自在に行われているか、歴然たるものがある。(17)

いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなるちごの御容貌なり。

『源氏物語』では、光源氏の印象が、「御覧ずるに」以下帝の眼を通して語られて、実感的であるが、『紫式部日記』ではそのようなことはなく、対面の際に聞こえた皇子の泣き声だけが報告されるにすぎない。これは、叙述の主体、紫式部が、この文の直前に「柱がくれにて、まほにも見えず」とある通り、下座に控えていて、皇子対面の

場に直接立ち合わなかったために他ならない。わずかに、若宮の声が聞こえてきた、それをそのまま記録したのである。式部自身が見聞したこと以外は記されないという原則に忠実に従って、『紫式部日記』は綴られている。叙述の主体の「自己」を決して離れないことを特徴とする日記に対して、いかに物語が、描くべき素材とその方法に関して相対的に自由であったか、この例は端的に示している。

のみならず、物語は、恐らく日記では、現実の原則に従って厳格に守られるべき一種の言語的制約からも自由である。『紫式部日記』において、紫式部が若宮と対面した天皇の様子を、『源氏物語』のようにその心中にまで入り込んで描くことをせず、自ら聞いた若宮の泣き声だけを記すにとどめたのは、単にそれが自らの見聞の外にあったためばかりではない。仮に式部が一部始終をつぶさに見聞していたとしても、それをこのようにあらわに書くことは、恐らく憚かれたであろう。と言うのも、事が至尊、帝王のことに属するからである。[18]『紫式部日記』においては、中宮についても、過度の言及をすることは遠慮すべきことであった。「御帳のうちをのぞきまゐらせたれば、かく国の親ともてさわがれたまひ、うるはしき御けしきにも見えさせたまはず、すこしうちなやみ、面やせて、おほとのごもれる御ありさま、つねよりもあえかに、若くうつくしげなり」と、中宮彰子について言い及んだ『紫式部日記』は、すぐに筆を返して「かけまくもいとさらなれば、えぞ書きつづけはべらぬ」と、描写の筆を納めているが、これは、足立稲直『紫式部日記解』が「こはかけまくもかしこき事は云もさらなれはと云言を略きたる詞なり」と注記した意味において理解すべきものであろう。[19]

天皇皇族にかかわる事柄を、軽々に口の端に掛けることは憚られるというのが、かつての言語的制約であった。無論、日記はその制約の内にあるが、物語はそれからも自由なのであった。それは、決して物語に描かれること

が虚構の事柄であるという理由だけによるものではない。虚構の存在ではあっても、物語の帝王は、実際の帝王と同じように、幾重もの敬語によって丁重に扱われている。[20] むしろ、それは、物語の叙述の主体が、個性を持った、現実の存在ではないことによるのではないか。

現実の紫式部から容易に離れ得る物語は、こうした、現実の言語上の制約をも、やすやすと越えてしまう。それを許すという点では、『源氏物語』作中の天皇は、いかに史実に準拠を持ち、いかに重い敬語を以って待遇されようとも、やはり紙上の存在でしかなかった。現実を写すこと仔細にして周到な『源氏物語』の世界は、ともすれば平安朝の史実と錯覚されがちであるが、[21] 物語という文体の特質は、常に忘れられてはならない。むしろ、物語は、何らかの点で現実を越え得る文体であったという点において尊重されるべきであろう。

そして紙上の存在ということで言えば、作中の世界の内外を自在に往還し、多くの束縛から自由な物語の文体を自ら体現しているような、その叙述の主体、語手こそが、何よりも紙上の存在なのではなかったか。

## 七

たゞふしをきあかしくらすまゝに、世中におほかるふる物語のはしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身のうへまで書き日記してめづらしきさまにもありなん、天下の人の品たかきやと問はんためしにもせよかし

女流による日記作品の先蹤、『蜻蛉日記』は、その初めに「ふる物語」「そらごと」と、「身のうへ」の「日記」

との対比を置いて、自ら綴る日記の序としているが、『紫式部日記』を考える上でも、物語というものを対比参照することは、必要なことだと思われる。

ふたたび『源氏物語』の物語論から引用する。

その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて、言ひおきはじめたるなり。

これに対して、紫式部が日記というものについて抱いていた考えが窺える箇所が、『紫式部日記』のなかに見出すことが出来る。

御文にえ書きつづけはべらぬことを、よきもあしきも、世にあること、身の上のうれへにても、残らず聞こえさせおかまほしうはべるぞかし。

『紫式部日記』、消息文と世に言う部分の末尾。「御文」とは直接には手紙、消息を意味するものであろうが、同じく叙述の主体が文章に対象化されるという点で、言われることは、日記の文体にも敷衍し得ることであろう。傍線に示したように、この二つの記事は相互に対比的に書かれていて、[22] 以って紫式部の、日記と物語に対する考え方を知るに足るものとなっている。

これによるならば、物語の内容は、「世に経る人のありさま」。それは、「その人の上とて、ありのままに言ひ出づること」のないものであった。対して日記、消息のそれは、「世にあること」、そして「身の上のうれへ」。「世にあること」とは、あるいは物語論に言う「世に経る人のありさま」に通じるところがあるかも知れない。しか

し、それに加えて日記、消息が「身の上」のことをその内容に挙げている点は注意されなければならない。「身の上」すなわち「自己」のことが、日記、消息の重要な叙述の対象であり、「自己」を「素材化」し「客体化」する日記の文体は、それに正しく対応している。

そして、特に紫式部に即して言うならば、その「身の上」のことが、「うれへ」をもって代表されることは、何よりも特筆されねばならないことであろう。紫式部にとって、「身の上」、「自己」を離れないところに書かれることと言えば、まずもって「うれへ」なのであった。(23)

確かに『紫式部日記』には、紫式部の「うれへ」に満ちた「自己」が対象化されて記されている。しかし、文章の上に「自己」を対象化することは、「身の上のうれへ」の問題にはかばかしい解決となり得たであろうか。すでに述べたように、紫式部の「うれへ」にとっては、日記という文体に向うことは、必ずしも有効な選択ではなかったのではなかろうか。

『紫式部日記』の消息文は、ただ、

かく、世の人ごとの上を思ひ思ひ、果てにとぢめはべれば、身を思ひすてぬ心の、さも深うはべるべきかな。なにせむとにかはべらむ。

という嘆息ばかりを記して終わっている。

一方、「身の上」の日記に対して、物語の方は、「その人の上とて、ありのまゝに言ひ出づることこそなけれ」と、特定の個人を越えることを標榜している。言語主体が、文章の上に対象化されない物語では、その「自己」は、とりあえずはその表面からは消える。そこには、「身の上のうれへ」の記される余地もない。物語とは、そ

うした「自己」を離れ得る、自由な表現の場なのであった。

物語の文体において、ひとたび姿を消した「身の上のうれへ」の行方がどうなるのか、それはそれとして新たな問題となろうか、[24] 螢の巻の物語論に、

よきさまに言ふとては、よきことの限り選り出でて、人に従はむとては、またあしきさまのめづらしきことを取り集めたる、皆かたがたにつけたる、この世のほかのことならずかし。

と言われる、物語の文体において、理想的な文章世界が展開され得ることは、疑いを容れない。

日記と物語とは、その文体もはっきりと異なれば、その内容もまったく異質である。ともに「式部か心を種」とする二つの作品、『紫式部日記』と『源氏物語』も、それぞれの文体に応じて、それぞれの世界を拓いて、互いに個性的である。そして互いに個性的であるがゆえに、この二つの作品はその異質性を相互に照らし出すものとなっている。この異なる二つの作品をつき合わせ見るならば、それぞれの作品の特性は、より具体的にたどり得ることになるであろう。そしてそこには、その「種」となった「式部か心」というもののあり様も、同時に浮かび上って来るように思われる。

**注**

（1）『源氏物語大成　研究資料篇』による。

（2）『新日本古典文学大系』による。

(3) 『扶桑拾葉集』は「序」として収録している。
(4) 『紫式部日記』『源氏物語』の引用は『新潮日本古典集成』による。
(5) 『紫式部日記』の冒頭部分とよく似た表現は、『源氏物語』に他にも散見される。例えば、

都にはまだ入りたたぬ秋のけしきを、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、槙の山辺もわづかに色づきて、（椎本）

冬になりゆくままに、川づらの住ひ、いとど心細さまさりて、（薄雲）

おほかたの空もをかしきほどに、木の葉の音なひにつけても、過ぎにしもののあはれとり返しつつ、（朝顔）

(6) 『源氏大鏡』には、「若むらさきの巻をことに殊勝に作りたれはとて其後はむらさき式部と召されけり」（『ノートルダム清心女子大学古典叢書』）とある。これによれば、「紫式部」とは、『源氏物語』の作者であるがゆえの呼称ということになる。
(7) 『日本思想大系』による。
(8) 『日本古典文学大系』による。
(9) 諸本「藤式部君」を欠く。富岡家旧蔵甲乙両本（松村博司編『栄花物語の研究　校異篇』）による。
(10) 時枝誠記『増訂版　古典解釈のための日本文法』は、「見ゆ」について「元来、或る事物が、視覚的に現象する語であったのではないかと考えられる」と述べ、「自然的現象以外の主観的な事実を表現するということは考えられない」としているが、文末に「見ゆ」を持たない場合との表現価値の差は、なお考えられねばならない課題であろう。
(11) 『源氏物語』にも、「見ゆ」が集中してあらわれることがあるが、その多くは垣間見の場面である。
(12) 他に例えば『紫式部日記』には、

女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそしらるれ

見どころもなきふるさとの木立を見るにも、ものむつかしう思ひみだれて、年ごろ、つれづれにながめ明かし暮らしつつ、花鳥の色をも音をも、春秋にゆきかふ空のけしき、月の影、霜雪を見て、その時来にけりとばかり思ひ分きつつ、いかにやいかにとばかり、行すゑの心ぼそさはやるかたなき

などの記述が見える。また逆に、

身のありさまの夢のやうに思ひつづけられて、あるまじきことにさへ思ひかかりて、ゆゆしくおぼゆれば、目とまることも例のなかりけり。

というもあった。

(13) 『清少納言枕草子』にも、中宮定子のもとに初めて出仕した清少納言の、「さし出でさせ給へる御手のはつかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるは、かぎりなくめでたしと、見知らぬ里人心地には、かかる人こそは世におはしましけれと、おどろかるるまでぞまもりまゐらする」(一八四段)(『日本古典文学大系』)という、『紫式部日記』によく似た感懐が述べられているが、紫式部の感懐の複雑さには、比較すべくもないものであろう。なお、『源氏物語』には、「御身近うもつかうまつり馴れば、憂き身もなぐさみなまし」(澪標)という表現がある。

(14) 対象語はまた、「鐘が聞える」「山が見える」などの、ある種の動詞述語についても考えられるが、『紫式部日記』においては、「見ゆ」を述語とする文の対象語として、叙述の主体、紫式部が想定されることがある(傍線部など)。

それ、心よりほかのわが面影をばつと見れど、えさらずさし向かひ、まじりゐたることだにあり。しかじかさへもどかれじと、はづかしきにはあらねど、むつかしと思ひて、ほけ痴れたる人にいとどなり果ててはべれば、「かうは推しはからざりき、いと艶に、はづかしく、人見えにくげに、そばそばしきさまして、物語このみ、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに見おとさむものとなむ、みな人々いひ思ひつつにくしみを、見るには、あやしきまでおいらかに、こと人かとなむおぼゆる」とぞ、みないひはべるに、はづかしく、人にかうおいらけものと見おとされにけるとは思ひはべれど、ただこれぞわが心と、ならひもてなしはべるありさま、宮の御前も、「いとうちとけては見えじとなむ思ひしかど、人よりけにむつましうなりにたるこそ」と、のたまはすをりをりはべり。くせぐせしくやさしだち、はぢられたてまつる人にも、そばめたてらではべらまし。

さまよう、すべて人はおいらかに、すこし心おきてのどかにおちゐぬるをもととしてこそ、ゆゑもよしもをかしく、心やすけれ。もしは、色めかしくあだあだしけれど、本性の人がらくせなく、かたはらのため見えにくきさませずだになりぬれば、にくうははべるまじ。

われはと、くすしくならひもち、けしきことごとしくなりぬる人は、立ち居につけてわれ用意せらるるほどに、その人には目とどまる。目をしとどめつれば、かならず、ものをいふ言葉の中にも、来てゐるふるまひ、立ちて

行くうしろでにも、かならずくせは見つけらるるわざにはべり。ものいひすこしうちあはずなりぬる人と、人の上うちおとしめつる人とは、まして耳も目もたてらるるわざにこそはべるべけれ。

視覚に関する語（波線部）の多用と相俟って、人の眼を意識する、『紫式部日記』の「自己」のあり方を窺うことが出来る。

(15) 例外的に人物評と呼ばれる部分では、叙述は対象となった人物の批評に集中し、「自己」は文章の表面からは消えている。

(16) また、『紫式部日記』某月十一日条「舟のうちにや老いをばかこつらむ」は、胡蝶の一首「亀の上の山もたづねじ船のうちに老いせぬ名をばここに残さむ」と発想を同じくしている。

(17) 『御堂関白記』は、同日の出来事を「参御前、奉見若宮給、余奉抱、上又奉抱給（寛弘五年十月十六日）」（『大日本古記録』）と記している。『栄花物語』は、『紫式部日記』を、「殿、若宮抱き奉らせ給て、御前に率て奉らせ給。御声いと若し」と改変、さらに「上の見奉らせ給御心地、思ひ遣りきこえさすべし。これにつけても、（心内語省略）と、おぼさるゝよりも、行末までの御有様どものおぼし続けられて、まづ人知れずあはれにおぼしめされけり」と続けている。

(18) 「今、この事を言ふに、官、位、高き人をば、容易き様なれば、入れず」（『古今和歌集仮名序』）。「かけまくもかしこき公家の御心地」（『栄花物語』）。「かけまくもかしこき君の御名を申は、かたじけなくさぶらへども」（『大鏡』（『日本古典文学大系』））。

(19) 『紫式部日記』には、他に「御ありさまなどの、いとさらなることなれど」、「かたじけなくもあはれに見ゆ」などとある。『清少納枕草子』にも「帝・親王たちなどは、さるものにておきたてまつりつ」（一八七段）とある。『紫式部日記解』はまた、「古くはかけまくもかしこくとのみつゝき云るを中昔になりてはかやうにつゝけ云る事折々見へたり」と述べているが、『栄花物語』「かけまくも思ひそめてし君なれば今も雲居を仰ぎてぞ見る」などはその例に当ろうか。

(20) 『源氏物語』にも、「おりゐの帝をかけたてまつらむはかたじけなし」（匂兵部卿）とある。

(21) 少女時代、『源氏物語』に忘我熱中し、「物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年にひとたびにてもかよは

したてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくしすへられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御文などを時〳〵まち見などこそせめ」と夢想していた『更級日記』の作者は、後年自らを顧みて、「光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは、かほる大将の宇治にかくしすへ給べきもなき世なり、あな物ぐるをし、いかによしなかりける心也」（『新日本古典文学大系』）と、その日記に記している。

(22) 石原昭平「『紫式部日記』の執筆契機―消息文末尾と螢の巻の物語論をめぐって―」（『日本文学』第二一巻第十号）に指摘される。

(23) 『紫式部日記』は古今序「世中に在る人、事、業繁きものなれば」に対して、「すべて世の中、ことわざしげく、憂きものにはべりけり」と記している。

(24) 例えば、『紫式部日記』駕輿丁についての「高きまじらひも、身のほどかぎりあるに、いとやすげなしかし」に類似する記述は、「高きまじらひにつけても、心乱れ、人にあらそふ思ひの絶えぬもやすげなきを」（若菜下）と、『源氏物語』にも見える。